026　古事記 010420
神話の中に、日本だけでなく世界でも、「禁室型」の話、「見てはいけない　そう言われると　よけいに見たくなる　禁を犯してしまう」という話が多くあるという。

パンドラの箱＜ギリシャ神話＞：エピメーテウスのもとに、「この壺は絶対に開けるな」と言って、パンドラという女性に壺を持たせて贈った。その二人は惹かれあい結婚した。後日、「この壺はなんだ」と開けてしまった。恨み、妬み、病気、不安、が溢れ出たので慌てて蓋を閉じた。最後の希望だけは壺に残った。

夕鶴：与ひょうが罠にかかった鶴を見つけ、罠から放してやった。後日、与ひょうの家に、つうが訪ねてきて、「嫁にしてくれ」という。二人は夫婦になった。つうは、「絶対に中を覗かないで」と布を織った。布は評判を呼んだ。ある夜、辛抱できずに与ひょうが中を覗いた。鶴が我が羽を抜いて機を織っていた。姿を見られた鶴のつうは、飛び去っていってしまった。

黄泉の国：イザナキは死んだイザナミを追って黄泉の国に行った、まだ往来が可能だった。天地初発の時（アメツチ　ハジメテ　オコリシトキニ）世界はすべて天上世界だった。生命が活動し、宇宙にモノが生じ、天の下に大地ができた。文明が進み自然は人間が利用できる形に変えられた。火の神が生まれ、たちまち不幸が、死があらわれた。死者の世界と生者の世界はつながっていた。生きたくなったら生きられた。ところがイザナキとイザナミが夫婦別れをして協調関係が破られ、対立関係になる。ヨモツヒラサカが千人で引くほどの大きな岩石で塞がれ往来不可になる。死者の世界が塞がれ、死者と生者が区別されるようになった。

アマテラスとスサノオ：逃げ帰ったイザナキは黄泉の国の穢れを祓うため、みそぎを行った。その時に左の眼からアマテラス、右の眼からツクヨシ、鼻からスサノオが誕生した。三神は過去を祓い清めた真新しい神、宇宙的イメージの中で生まれる。イザナキはさっそく、アマテラスには天上世界、「高上の原」を、ツクヨシには夜の世界、スサノウには海を治めるよう命じた。

スサノオが父イザナキの命に背き怒りをかい追放される。そこで高天の原に昇ってアマテラスに暇乞いをする。この行為を疑った姉は、弟の侵入を阻止しようとする。弟は身の潔白を証そうとウケヒをして勝つ。勝ちに乗じて高天の原で大暴れする。恐れおののいたアマテラスは岩屋戸に籠ってしまう。神々が集まってアマテラスを誘い出すと、スサノウは、高天の原からも追放されて、出雲に降り、そこで大蛇を退治して英雄となる。

　西條先生の話によると、古事記には、「元ネタ」になっている口承神話、おとぎ話、言い伝え、などがあったようだ。古事記はそれらを寄せ集め編集編纂されたものらしい。不思議に思うことは、古事記以前は文字がなかった、なのに元ネタがあった、これが元ネタである、なんてことがどうしてわかるのだろう。
　古事記ではアマテラスとスサノオは兄弟の設定だが、実際は兄弟ではなかった。二人の神様が居て、人々に別々に信仰されていたそうだ。また、スサノオのオロチ退治の話は古事記のオリジナルだそうだ。
　スサノウは、幼児期は地上で泣き虫の甘えん坊。小年期は高天の原で粗暴な暴れん坊。青年期は出雲で若々しい英雄。老年期は根の堅州国のおいぼれ長老。

　オロチは山の神、オロチを祀るのはクシナダ姫である。クシナダ姫は稲の神の巫女だった。オロチは山の神、山の神、川の神、水の神、稲作にとっての大事な神なのだ。スサノウはオロチを殺すと同時にオロチを祀る。スサノウは古い秩序を打破して、クシナダ姫と結ばれ、やがて国の神、オオクニヌシがあらわれる。壬申の乱で破壊された秩序の断片から、新しい世界が造られた。

027　古事記　060420

オレの個人的な話だけれど、日本の二つの不思議をしみじみ感じている。天皇制のことと稲作のこと。日本人はこの二つをずっと大事にしてきた。天皇制はいまだに大事にしている。米は 50 年 100 年前から徐々にその地位が、価値が落ちてきているが、長い間、突出した存在だった。

天皇制がいつの時代から確定したのかは、さまざまな学者の議論に任せるとして、1500 年以上日本には天皇がいた。世界の各国での王制、これが代々、1000 年 2000 年続いているところがあるのかと聞かれると知らないが、日本では天皇家がずっと続いている。最初に興ったときには、武力、経済力、統率力などの力が勝って、他を圧倒して王になった。王の子も王になったというように代々続いた。いくつもの時代があって、外国のように、武力、経済力、統率力などの力が勝った人物が幾人か出てきたが、その幾人かの人物は、外国のように、天皇家を攻め、滅ぼし、王殺し、という方向には進まなかった、という不思議。

もう一つは米、稲作がいつの時代から始まったのか、これもさまざまな学者の議論に任せるとしても、「米」というものを最大の作物、宝物、経済の基本、貨幣と定めてきた。米を作る農民、米に必要な水田、治水に力を入れてきた。他の品物、芋や野菜や魚介類、鉄や材木、金銀財宝、そういう品物より米が尊ばれた。

ここに高天の原皆暗く、芦原の中つ国悉くに暗し。これによりて常世往きき。ここに万の神の声は、さ蠅なす満ち、万のわざわい悉くに発（おこ）りき。

太陽が無くなり、すべて闇の世界である。災いのはびこる真っ暗闇は、スサノオの暴力で高天が原でなくなったにひとしい。これが勝ちさびの結果なら、姉が恐れたようにスサノオは高天が原を奪ったのだ。

ここに、「ウケイ神話」という不思議な言葉がある、これがよくわからない。「男神を生んだほうが、ウケイの勝者になる」ということだけれどよくわからない。

岩屋戸神話には、全体を取り仕切るオモイカネという神がいる。彼が神々を集合させ、八百万の神たちがやってくる。鶏を鳴かし、鏡、玉、垂れ布を作り、祝詞を唱えアマテラスを呼び戻す祭りを行う。ウズメの裸踊りにつられアマテラスが顔を出すと、怪力男が太陽神を引っ張り出す。アマテラスが再び現れると、スサノオは出雲に追い払われる。

天の岩屋戸でアマテラスは一変する。スサノオに追い込まれ避難したアマテラスだが、ふたたび岩屋戸からあらわれると、あっさりスサノオを追放する。祭りに仕える巫女だったアマテラスが高天が原を取り仕切るたのもしい皇祖になった。

日本の神話は、上：高天が原、中:葦原の中つ国・下:黄泉の国と、根の堅洲国と、海神の宮の、垂直になっている。葦原の中つ国は、「出雲」「日向」であらわされることがある。出雲と日向は地上世界の代表となっている。

芦原の中つ国:「なぜ葦なんだ　なぜ芦原なんだ」不思議に思っていた。先生曰く：人々ははじめ、山のすそ野や扇状地などに住みついた。山麓状の地形を平野という、そこに葦が生えていた。葦原の葦を刈り取れば、そのまま田んぼになった。稲がよく実る場所を求めて、弥生人は葦原をめざして移動した。葦原は豊穣の印だった。未開の芦原は最高の場所だった、人々は先を競って住みついた。葦原は神聖な場所だった。芦原の中つ国と呼ぶのは、記紀だけである、風土記、祝詞、万葉集では、「葦原瑞穂国」「葦原水穂国」と呼ばれた。

このページの初めに書いたが、日本人は天皇家を大事にしている。「そんなもん」とうそぶく人たちでさえも。

日本の米の消費量が減った、日本人は米を食わなくなった、と聞くが、まだまだ皆さん好きである、毎日米を喰っている。「そんなもん」とうそぶく人たちも、米は喰っている。オレも毎日喰っている。

028　米　090420

　前回、日本の不思議ということで、天皇家と稲を取り上げたが、「天皇家」の話はまた後日ということで、今回は「米」の話です。

　アマテラスの孫、ニニギノミコト（おむすびの語源）は、三種の神器とともに稲穂を授けられ、高千穂峰に降り立った。豊葦原千五百秋瑞穂国（とよあしはらのちいおあきのみずほのくに）を作りなさい。＜日本書紀＞

今日は社会科のお勉強、稲の話、米の話、クボタ社のサイトを参考に。

◎縄文時代に稲作が日本に伝わってきた。インドのアッサムや、中国の雲南山岳地帯で始まった稲作が伝えられた。直接に長江下流から・朝鮮半島を経て・台湾を経て、と様々な説あり。

◎弥生時代中頃には、東北北部まで伝わっていた。静岡県の登呂遺跡では、12 個の竪穴式住居、7 万M²の水田、高床式倉庫跡が出土している。農具のほとんどが、カシ材を加工したものだった。米は貯蓄可能なので、貧富の差が生まれた。治水、灌漑などの共同作業が必要だった。村ができ、首長があらわれた。

◎古墳時代には、稲作の生産力があがり、安定していった。社会が発達し各地に豪族が生まれた。牛馬を使った農作業が始まり、鉄器もあったようだ。溜池や水路がつくられた。豪族たちはそれらの土木技術を応用して古墳を作った。

◎飛鳥時代には米を基本通貨とし、税として納める社会が始まった。大和朝廷は人々に田を与え、税を納めさした、この田を、口分田という。

◎奈良時代には、田んぼの面積が現在の三分の一の 100 万ヘクタアールに達していた。朝廷は田地を増やすため墾田永世私財法を出した。有力な貴族や寺社は、先を争って開墾をはじめ、荘園という私有地が広まった。

◎平安時代には、朝廷の口分田が減り、荘園が増えていった。政府は無力化していき、農民は武装するようになり、軍事力を持つ武士団になっていった。

◎鎌倉時代には、元農民である武士（在地領主・開発領主・根本領主）は、米を握り、富と権力をもった。一方、荘園を持つ、貴族、寺社の支配が弱くなっていった。水車、鉄製農機具、鍛冶屋、案山子が登場した。

◎室町時代には、ますます治水技術が発達、不毛の土地が沃野に変えられていく。甲州の武田信玄は、「信玄堤」を、肥後の加藤清正は、「乗越堤」を作って治水を行った。

◎桃山時代には太閤検地が行われ、「一地一作人」の原則を定めた。それまでの荘園制で、荘官、地頭、守護などの中間搾取を排除した。

◎江戸時代には、各藩で新田開発が盛んになった。長雨、冷害、旱魃などで、大飢饉も何度もあった。1732 年享保の飢饉＜長雨で、西日本一帯の収穫量が 15%　1 万人以上が餓死＞　1783 年天明の飢饉＜霜の害によって起こり、数年続き、50 万人以上が餓死＞　1833 天保の飢饉＜冷害、洪水、大風雨などが原因、農村では百姓一揆、都市では、米屋、質屋を襲う打ちこわしが起きた＞

　商人が力をつけ、米相場を決め、経済を支配し、町民文化に移っていく。

029　摂津峡 100420

◎コロナ、コロナと世のなか騒然としている。本日から非常事態宣言が出たようだ。「オレは　いつも通りで　いいんだね」と思っている。日々アトリエに籠っている、昼頃になると飯を食い終わって、自転車で河原に出かけていく。河原では1時間半ぐらいの間に、2.3の人、多い時には10人ぐらいの人を見かけるが、皆さん顔さえ見分けられない距離、見かけるだけである。スーパーマーケットに食料を買いに行く、店舗の中は人が多い、身体が触れることもある。夜も10.20分ぐらい歩く、これも人とすれ違っても、顔さえ見分けられない距離かな。

◎医療関係者の知人、「微熱が出た　大変だ　まさか」と職場に行ったそうだ。ドアーの前で、「だめ　入るな　外へ」「まるで　ゴミ　みたい　ゴミよ　ゴミ　あつかいよ」中から医者が出てきて、診て薬をくれそのまま自宅に帰ったそうだ。昔、オレのパソコンに、ウイルスに侵されたことがある。「うわわ　ウイルス被害に　あった」そう思った矢先に、「お前から　ウイルスを　うつされた」という苦情が来た。ウイルスというものは、「被害者が即　加害者に　なる」ということを認識した、自覚した。

◎生きていくうえで、被害者であるという叫び、弱者であるという叫び、叫びはよくない。権利を振り回して、泣きわめくのはよくない、オレもそんなことはしてはいけない、じっくり振り返って考えねば・・。
　オレの生き方。えらそうなことも言いたくない、うそぶきたくもない。上も下も非難したくない、それこそなるようにしかならないよ、と想う人生。

◎摂津峡にいる。桜が満開だ、これはいい、きれいだ。家の近所でも、安威川河原でもさくらは咲いているが、「なんだか　しらじらしく　きにくわないね」そう思っていた。桜をめでる、桜を語った文面はいくつも見てきた、みなさんそれぞれに感動を伝えている。オレもなにかを感じなくてはと思いながらも、もう一度言うが、「なんだか　しらじらしく　きにくわないね」という言葉しか出てこなかった。ところが山のふもと、里山というのか、小さい山ながらも自然の中にある桜の群れ、「おお　いいじゃない」と思ってしまった。「おいおい　勝手なことを言うなよ」と近所の桜が怒るかもしれないが、山という自然の中に入ってそう感じるのか、桜自身が山を感じて桜を押し出しているのか、それはわからない、オレの勝手かもしれない。

◎正月に一人でポンポン山に来ている。その時は、自転車で、摂津峡上ノ口までエッチラ漕ぎ登って，そこから歩いた。今回は4人の方と同道だ。摂津峡下ノ口から入ってみようと自転車を進めた。

◎地図を見てみると、我が家からほぼ北方向、直線距離で12キロと出ている。行くときには、171号線を高槻方面に向かい、富田の交差点を北上した。この道はのぼり坂、「自転車にはきついな」と知っていたが、ほかの道は知らない、我慢して登った。帰りは芥川の河川敷道を走った。下ノ口に立ってみると、高槻の市街地がまっすぐ見える、平らな道がずっとつづいている、富田からののぼり道は間違っていた、坂をのぼらずに行ける、あらためてわかった。自転車で気軽にこれる、次回また是非こよう。

◎摂津峡とおおげさにいうけれど、短い距離の渓谷だ。芥川は淀川にそそぐ川、さほど水量は多くない、我が近所の安威川の半分ぐらいかな。そんなこのあたりの川が、わざわざ岩石地帯、狭い峡谷をつくったのか、地面の不思議である。田畑がつくれない田園地帯の真ん中で、山と渓谷がそのまま残ってしまったという地形。流れる水もそれほど澄み切ってきれいというわけでもない。ただ午後の時間、西日がさして輝いてきた。

◎摂津峡を通り過ぎ、上ノ口から神峰山寺、本山寺に向かって歩いた。時間切れで引き返した。下ノ口の公園で、持参した缶ビールをいただき桜の前でしばし休憩。

030　古事記 140420

日本書紀と古事記の二つのことを、「記紀」という。日本の歴史を伝えるということでは共通している。両書とも「葦原中つ国」を天皇家が支配するということが書かれている。同時期の風土記は、713 年に朝廷から編纂命令が出され、各地方でまとめられた。

日本書紀は 720 年に完成。国家の歴史書で、隣国の中国を意識して漢文で書かれている。古事記は 712 年に完成。天皇家のために書かれた歴史書である。

いよいよ、オオクニヌシの登場。

◎因幡の素兎→手間山→根の堅洲国→ヤチホコ神の歌→国造り。

この一連の話は日本書紀には載っていない。民間神話にはこの話がなかったので、古事記の中で創作された。民間でポピュラーな、「オオナムチ」「スクナヒコナ」コンビを解消して、古事記では日本にふさわしい国土生成の神を必要とした。アマテラス大神に国土を譲り渡すような従順な神でなくてはならなかった。

◎　一般には、因幡の白兎、で通っているが、そうではなく、素兎、なんだよ。

◎　因幡の素兎を助けたオオクニヌシは、その当時、オオナムチ、という名の少年だった。

◎　兎がなぜワニの背中を跳んで陸地に着く直前で失敗するのか。この類の話は南方系の神話に多い、主題は知恵の話。身体の小さい陸地の生物が、水棲の愚鈍で大きな生物を利用して窮地を脱する痛快話。丸裸の兎を救ったのは、オオナムチ（オオクニヌシ）。古代では医療は魔術だ。魔術は王の重要な資格。

◎　オオナムチ（オオクニヌシ）は以後、何度も死と再生を味わう。オオナムチ（オオクニヌシ）が王になる、通過儀礼（イニシェーション）に支えられる。イザナミは黄泉の国に行って腐乱するが、イザナキと交信できた。アマテラスは岩屋戸に籠っていなくなり、再び現れると、前より強い神になる。神々は死なない。

◎　素兎のあと、八十神が焼石を山から落とす。オオナムチは下敷きになって死んでしまう。貝の女神が生き返らせる。またまた、八十神が罠を作って、オオナムチを殺す。母が生き返らせる。

◎　オオナムチはスサノオのいる、「根の堅州国」に行く。スサノオはオオナムチを助けるどころか、数々のいじめをする。蛇やムカデの部屋に入れられるとか、野焼きで焼き殺されそうになり、鼠穴の落ちて難を逃れる。

◎　根の堅洲国での通過儀礼は、王になるための儀礼、即位式のようなものだ。

◎　オオナムチは根の堅洲国を脱出してスサノオの娘、スセリ姫と結ばれる。オオナムチは地上の王になっていき、スサノオは娘を取られ、根の堅洲国に残された哀れな老人となる。

さてここから、ヤチホコ神の歌→国造り、と話が進むが、このあたりは聞き覚えがなかった。

◎四首の神語り歌が載っている。ふたつは、ヤチホコ（アマテラス）が、ヌナカワ姫への夜這いにてこずる様子をうたい、朝になって翌日の通ってくる約束をする。三首目は正妻、スセリ姫の話。女あさりのヤチホコガ、スセリ姫の嫉妬を思う。姫は、夫をなだめる歌。

◎王の役目は、立派に国を治めることと、子孫を残すことのふたつ。国を治めるのは政治の話。子孫を残すのは、恋愛や結婚の話。ヤチホコ（アマテラス）の女あさりの項、というかっこうの悪い話かな。

◎オオクニヌシが国を治めるのは一時的。いずれ天孫に国を譲り渡す存在。まじめに語るより、宴席のくだけた雰囲気がいい。ヤチホコに名を借りたオオナムチがみなから茶化され、喝さいを浴び、ドタバタ劇の主役を演じる。夜這いにドジを踏んだ間抜けな王様だ。

◎オオクニヌシの国作り。

◎前段はオオクニヌシとスクナヒコナがコンビを組んで国作りを行い、途中でスクナヒコナが常世に去る。

◎後段は、海を照らしながらオオモノヌシ（三輪山）がやって来て、「自分を祭れば　国は治まる」というので、オオクニヌシは祭った。オオクニヌシは国作りをした神になった。

031　摂津峡 150420

◎10 時：摂津峡、下の口を渓谷沿いに歩き始めた。一週間前の 3 月 8 日に数人の方々とここにやってきた。その時はポンポン山まで行けなかった、そのリベンジもある。新型コロナウイルスが猛威をふるっている、非常事態宣言が出ている、電車やバスには乗りたくない、ということもあって、自転車でここにやってきた。

◎朝起きた時点で、「晴れている　風はさほど無いようだ　行こう」飯を食って、洗濯、ごみ出し、弁当作り、庭を見ても木の葉が揺れていない。自転車で走りだすと、「風がきついぞ　坂道　向かい風ならいやだな」

◎自転車で摂津峡下の口→上の口→神峰山寺→本山寺→ポンポン山→来た道を引き返した。8 時間行動。

◎二日間雨が続き、明日は晴れるが風がきついと予報士。非常事態宣言が出て一週間ぐらいかな。日本はまだまだ規制がゆるいという。公共交通は普段通りに動いている、店舗もいくつか開いている、外国のようにまったくのストップではない。警察署長の歓迎会、医学大学の懇親会、馬鹿めが、と思える集団感染。オレも、展覧会でパーテイをしていたら、その 2 週間後に馬鹿めがの集団感染を起こしていたかもである。

◎渓谷、なかなかに趣があるけれど、20 分ぐらいで終わってしまった。せめて 1 時間ぐらいあればいいのだが。

◎11 時：神峰山寺の山門を過ぎたあたりで休憩。昨晩の残り物、コロッケをほおばった、旨いね。

◎12 時:本山寺に着いた。階段に腰掛け昼飯を食った。いつもの玄米飯に手造りの梅干を入れたおにぎりを二つと、コロッケを半分喰った。おにぎり一つとビスケットを残している。水は 1 リットルもってきた。

◎今日は寒い、冷たい風が吹く、陽が当たれば暖かいはずなのに季節が少し戻ったようだ。飯を食いながら冬用ジャケットを羽織った。面白い看板を見つけた。「これより奥 2 キロのところに　大杉あり　古来より天狗杉と称し　鞍馬　愛宕　本山寺　箕面　これらを飛翔する天狗の休息の場所と　伝えられる」

◎天狗杉のところにやってきた。立派な天然の杉だけれど、枯れそうになっているのか、元気がない。地面から二股に割れ、上のほうも折れて無くなっている。太い藁縄の飾りが巻かれ、白い紙が垂れている。調べるとこれら、しめ縄といい、紙垂（しで）という、神道のものらしい。すずらんのような白い花をつけた木がある、名前は失念している。紫色の山つつじがたくさん咲いている。地面に白い花びらが散らばっているのにまわりに花なぞない、上を見上げればそうとう高いところに咲いている、白モクレンかな。

◎ポンポン山に来ると思い出すのが、猛烈台風。台風一過、一週間ぐらいにやって来て驚いた。天狗杉のあたりから通行不能、「あれれ　なんということ」驚いたが、「引き返しませんぞ」潜り乗り越え、下へくだり、上へのぼって、てっぺんまで行けたときには嬉しかったね。

◎頂上のポンポン山でさえ 678 メートルだから、このあたりは標高 600 メートルぐらいかな。天気予報では晴れるが一部の地域では暴風が吹くと言っていた。高度があがるにつれ、風の音が、ゴーゴーヒューヒュー鳴ってきだした。冷たい風が吹いてくる。このあたりの植林された樹々が、倒れてしまったやつ、倒れきらず斜めにやっと立っている奴、横の木にもたれかかり、そのまた横にもたれかかり、ほとんどが枯れ、葉が茶色く変色している。それらが風に吹かれ、ガタガタゴトゴト擦れあって音を出す、まさかこっちに倒れてこないことを祈って、歩いている。

◎1 時過ぎにポンポン山頂上にやってきた。678 メートル。自転車時間を入れて 4 時間、いささか疲れている。ベンチに腰掛け、残ったおにぎりとコロッケを喰った、水も飲んだ。記念撮影をしようと、カメラのタイマー設定をして、レンズを見た。広角の見上げ写真を撮った、レンズを見ずに、向こうのほうを見つめればよかった、と反省。温度計がぶら下がっている、10 度だ、寒い。そういえば冬、雪の中を登ってきたときは、温度計がマイナスだった、寒い寒いと早々に切り上げたのを覚えている。

◎帰り道はほとんどが下りの斜面、どんどん歩ける。非常事態宣言が出ているからなのだろうか、「山ならいいだろう　感染はないだろう　顰蹙も買わないだろう」とけっこうな人数の人を見かけた。普段なら、あまり人の来ない山、ほとんど人に会わないのだけれど、今日は 20 人ぐらいと出くわしたかな。

◎神峰山寺に近づくころには、暖かくなってきた。寒冷前線が遠ざかったようで、風の音も聞こえなくなった。ビスケットをほおばり、摂津峡を抜けて自転車までたどり着けた。家まで、8 時間の山行でした。

032　ポンポン山　200420

◎コロナ禍の真っ最中、非常事態宣言の出ている今、またまたポンポン山をめざして自転車を走らせている。走り出して、財布を忘れたことに気づいた。「あれれ　水も食料も　ことたりてはいるが　ノーマネー　これはつらい　自転車君　パンクでもしなければ　いいが」とそのまま進んだ。

◎出る前に、何度も地図を検索、目的地は我が家から、ほくほく北東に7キロぐらい、阪急レール沿いに、JRレール沿いに、高速道沿いに進めばいいのかなと、頭の中で道順が組みあがっていく。

◎富田駅付近から、今城塚古墳、芥川の堤防を上にあがれば、下の口に着く。今回の集合地点は、上の口、「あの坂が嫌だな」と思いつつ自転車を進めた。「おや　今日は早いぞ」と思ったところで坂にさしかかった。

◎だらだら坂、自転車を降り　押して歩いた、30分足らず歩いた。家から1時間強で上の口に到着した。道路の向かい側に同道の、バンちゃんが手を振っている、マスクをしているのでわからない。「もう　ふたり　誘った方がおられるので　9時まで　待ちましょう」話しているとバイクに乗った林さんがやってきた。

◎お二人は姿が見えず、三人で出発。2.3日前の天気予報で晴れマークが出ていたが、降水確率は20%の曇りマークに変わっていた。青空は望めない、折りたたみ傘に上下のヤッケをザックに入れた。起床時点で雨はまったくない、暖かい、冬のジャケットから薄いジャケットに変えた。

◎神峰山寺から本山寺までは舗装道、地面は半分濡れている。たっぷり湿気を含んだ空気、雨粒は感じないが、空気は濡れているのだろうね。半月前からの山つつじ、紫色が木々の間、緑の葉っぱとあいまって目をさす。途中に、山にうっすらかかっていた雲というのか霧というのか、白い霞がこれかなあ。

◎今日は行き場のない人たちが、わんさか山に来ている。神峰山寺の駐車場はさほど車はなかったが、本山寺の駐車場はほぼ満杯状態、あきらめて帰っていく車も見かける。いつもは見かけない、幼児、小中学生、高校生たちの群れ、たくさんの人たちが来ている。高校生の叫び声が山に響きわたる、「きみら　大きな声出したら熊　怒りよるぞ」「・・」くだらん冗談を言ってしまった。

◎10:30本山寺までやってきた。どんより曇っている。針葉樹と広葉樹の山の中、薄暗い森の中、樹々が黒く空は白く、霧雨がありやなしや、どうぞ降らないでと頼む天気だ。

◎同道の二人は、マラソンを趣味としておられる。オレと同年のバンちゃんでも、先日、ハーフマラソンを走ったとか。今年はいろいろなマラソン企画がすべて中止になってきているらしく、「〇〇マラソンが中止で　お金が　すべて帰ってきた」と喜んでおられる。というのは、マラソン企画などの場合、中止になっても返金はないらしい、というおかしな世界。

◎体力のある二人はどんどん進む、高度が高くなってきたのか、風が冷たく感じる。白い花びらが散っている。はくもくれんかな。白い花びらを見ると、「テイッシュ　の　ようだね」と言いあっていた澤山さんを思い出す。雪の山の中、春の季節のアルプス、白い雪の地面に白い花びらが舞い散る情景だった。

◎12時前にてっぺんにやってきた、温度計は10度をさしている。一瞬、陽が照り、青空が顔を出した。

◎「おお　おもしろい花　きれい」「まむし草」「「いやこれは　ゆきもちそう」神峰山寺林道あちこちに咲いている。まむし草だと思ったが、物知りおじさんが　「ゆきもちそう」と教えてくれた。帰り検索すると、この二つは同属か同種だそうで、「ゆきもちそう」は絶滅危惧種でもあるらしい。山でよく見かける赤いたまたま、トウモロコシ状の実は、ますし草の実、これらは毒草でもあるらしい。

◎**神峰山寺と**本山寺の間の舗装された道に、建築廃材が車一台分ぐらい捨ててあった。前回来た時には無かったので、最近投棄されたものらしい。「不法投棄禁止」の看板があちこちに立っている。どこの建築業者の仕業か知らないけれど、情けないしわざだね。

◎本山寺で水を汲んで帰ったが、今日の山はのどの渇きを覚えず、1リットルの水が無くならなかった。水が足りなくなると、川の水でもゴクリ、旨いのだけれど、勝手なもので、十分にあると食指が動かない。

◎まだしばらくはコロナが収まりそうにない今日この頃、ここしか来るところはないかなと思う。ポンポン山は適度に疲れて、それなりに楽しい、次回またお世話になります。

033　古事記　210420

◎ここからは、アメノホヒ・アメノワカヒコ・タケミナカタ、等が登場。

◎アマテラスは高天が原の神、スサノオは根の堅洲国の神である。スサノオの子孫である、オオクニヌシは地上の支配者となり、わがもの顔に振る舞う。高天が原のアマテラスにとって危険な存在となる。

◎天井に君臨するアマテラスが、その権威によって、地上を牛耳るオオクニヌシの支配権を奪うのが、国譲りの神話である。

◎まず最初の使者は、アメノホヒは、オオクニヌシに媚び、3 年経っても復命しなかった。次の、アメノワカヒコは、芦原の中つ国を自分のものにしようと企み、オオクニヌシの娘と結婚して、8 年経っても復命しなかった。最後がタケミカズチだ。この神は剣の神、武力でオオクニヌシに迫る。オオクニヌシは天つ神に地上を譲り渡し、出雲大社に祭られた。

◎二番手の、アメノワカヒコは命令を破って 8 年間復命しなかった。アマテラスは、雉の神を探りにやるが、アメノワカヒコは雉の神を射殺してしまう。その矢が勢いあまって高天が原まで届いてしまう。タカミムスヒは、「アメノワカヒコが　邪心をだいているなら　矢に当たって　死ね」と射返した。アメノワカヒコはその矢に当たって死んでしまった。裏切り者の死である。

◎この話は世界的に好まれた話だそうだ。旧約聖書に、「ニムロットという勇者が　天に放った矢が　帰って来て　自身を射殺してしまう」

◎アマテラスの孫である、ホノニニギが、地上に天降り、国土を統治する。

◎記紀神話のクライマックスが天孫降臨の場面だ。ホノニニギの命（みこと）が天降って、地上の時間が動き出す。代々の天皇が、順次、天下を治め始める。その起源が天孫降臨と呼ばれる。万世一系のおおもととなっている神話だ。

◎故（かれ）、ここに天津日子番能爾爾藝（アマツヒコホノニニギ）の命に詔（のり）たまひて、天の岩位（いわくら）を離れ、天の八重たな雲を押し分けて、稜威（いつ）の道別道別（ちわきちわき）て、天の浮橋にうきじまり、そりたたして、筑紫の日向の高千穂のくじふる嶺（たけ）に天降りまさしめき。

◎　降臨地:原文では､｢豊葦原之千秋長五百秋之水穂国(とよあしはらのちあきのながいおあきのみずほのくに)と書かれているが､「葦原の水穂の国」である。

◎　日向:宮崎県だが、今も県内の南北で、「降臨地は　こっちだ」と争っている。南は＜霧島連山の高千穂峰＞北は＜高千穂町＞ここには高千穂神楽が伝えられている。

◎　古事記では、ホノニニギは賑やかに降臨する。随伴神として、十神のお供がいた。八神は、天の岩屋戸の話で出てくる神々。二神は神武天皇の大和征服に付き従った神だ。枯れ木も山のにぎわいである。

◎　随伴する神の中でも三種の神器を、「その招きし八尺（やさか）の勾玉　鏡　また草薙の剣・・」ホノニニギが、降臨する際にアマテラスが、ホノニニギに授けた三種類の宝器である。歴代天皇が伝世してきたが、実物は、非公開で、どなたもが見たことがないとか・・。

◎　八咫鏡（やたのかがみ）伊勢神宮の神体　アマテラスが天の岩戸に隠れたとき、外に出すために使われた。

◎　草薙の剣は熱田神宮の神体　スサノオがヤマタノオロチを退治したとき使ったもの。

◎　八尺（やさか）の勾玉　アマテラスが天の岩戸に隠れたとき、外に出すために使われた。

◎出雲でなく日向に降臨したのは、そこが未開の場所だったからだ。政治的には未開でも神話上は豊穣だった。大和朝廷からみれば、他の祭政システムは悪だ。他の国家の勢力が及んでいるところは、野蛮な国、災いのはびこる悪の王国だった。葦原の中つ国は、オオクニヌシが君臨し、その一族が牛耳っていた。

034　古事記　250420

◎ホノニニギが天降った後はすこぶる神話的だ。舞台は南九州に移って薩摩半島、野間岬だそうだ。

◎降臨したホノニニギは、コノハナサクヤ姫に一目ぼれして、兄の海幸彦（ホデリ）と、弟の山幸彦（ホホデミ）が生まれる。兄弟は互いに道具を換え猟をするが、さっぱり獲物が獲れない。おまけに弟の山幸彦は兄の針をなくしてしまう。兄は怒り、針を返せという。弟は仕方なく、海神（わたつみ）に行くと、そこで大歓迎され三年ほど過ごす。やっと鯛の喉にあった針を持って帰り、兄に仕返しをして服従させた。弟の山幸彦（ホホデミ）はトヨタマ姫との間に子を産む。出産の場面を覗くと、女はワニだった。その子は妹が育てウガヤフキアエズとなり、そのまた、子が神武天皇である。

◎この話は神話的である。降臨のあと三代の時を経て、天皇が誕生する。兄弟争い、海神に行く、覗くなの場面。このような、「話型」は世界中に類型があり、何万年も語り継がれ、楽しんできた。

◎兄弟争いは、兄の海幸彦（ホデリ）と、弟の山幸彦（ホホデミ）が戦い、弟が兄をやっつける話。兄は隼人の祖神、弟は大和朝廷の祖神ということだ。大和朝廷の古事記なので、大和朝廷が勝つことが決まっている話。

◎海神の話は、異郷を訪問する、そこで呪言、呪物という超自然的なものを手に入れ、兄をやっつける。古事記には異郷訪問が三つある。「黄泉の国」「根の堅洲国」「海神の宮」

◎ヤマトタケル　この名は、同世代の我々は、幼少時代、親から聞かされた説話の人物。我々の親の世代は、「日本はすごいんだ　神の国だ　悪をやっつけてきた　日本人は優秀だ」と教育されてきた。

◎初代天皇、神武から始まったとされる大和朝廷、12 代景光の子が、ヤマトタケル。ちなみに仁徳は 16 代、継体は 26 代である、最近の歴史学では、継体の実在は確実とされるが、それ以前は疑問視されている。歴代では 126 代。初代神武は BC700 年ころ。継体は 507 年。

◎明治以降、天皇を中心とする中央集権国家体制整備がすすめられた。歴代天皇の確定にあたっては、水戸藩の「大日本史・水戸学・尊王論」が大きく影響を与えた。

◎古事記では、「倭建命」日本書紀では、「日本武尊」。記紀ともに同じような内容だが、古事記では、ロマン的に豪胆に、父に疎まれ、悲劇的に書かれている。日本書紀では、天皇賛美の傾向が強く、父である天皇に忠実で信頼度も厚かったとされている。

◎一説には、大和朝廷において、日本平定に尽力した数人の勇者たちの偉業を統合し、それらを一人の人物として創り上げた架空の英雄が、ヤマトタケルだという。

◎ヤマトタケルは、幼少時代から気が荒く、兄弟げんかで兄の手足をもいで殺すような子供だった。父に疎まれ、九州のクマソタケル兄弟討伐を命じられる。女装してクマトタケル兄弟に近づき殺した。

◎その後、山の神、河の神、穴戸の神を平定し、出雲にわたり、朝廷に復命する。八咫烏（やたがらす）も登場。

◎次に東方の蛮族成敗を命ぜられる。「危急の時は　これを　開けなさい」と草薙の剣と袋を渡された。

◎相模では火攻めにあい、袋の中の火打石で難を逃れた。足柄坂：神奈川、甲斐、信濃、尾張と平定していく。尾張で姫をめとり、伊吹山の神を成敗に向かうが敗れ、三重で亡くなる。

◎ヤマトタケルは白い千鳥となって、伊勢国から河内国へ飛んだ。志幾（しき）に白鳥御陵を作った。

◎日本の歴史の不思議として、「天皇制が長らく続いた」「稲作を　米を　何よりも大事にしてきた」をあげた。稲作・米に関して前回表わした。天皇に対して、天皇制に対して、極端に好き嫌いを言う人たちもいる。極端に嫌いという人でも、「天皇制をつぶせ　天皇家をつぶせ　皇族を抹殺せよ」とは言わなかった。

◎天皇に対するオレの意見としては、「天皇制は　天皇家は　徐々に　もう少し体制から離れたほうがいいのでは　経済的に　自立するほうが　いいのでは」「天皇家の在り方　家族構成　冠婚葬祭　行事等は　天皇家に自身に　任せたらいいのでは」なんて思っている。今のままでは　天皇家もしんどいのでは・・。

035　剣尾山　270420

◎滋賀県、湖西の山を登りたいと思っていた。高島トレイルもよし、峰床山もよし、比良山系もよし、行きたいところはすぐに思いつくのだけれど、コロナ禍の今、非常事態宣言の出ている今、「外出しないでください」「県境を超えないでください」と叫ばれている今、「自転車で　ポンポン山に」と思っていた。

◎何度か来たことがある能勢の剣尾山と決め、車で1時間強走ってきた。前日調べると、豊能町から妙見山を通り抜け、くねくね道を上り下り、往路はそこそこうまく走れたが、復路は大回りをしてしまった。

◎8：30　能勢温泉下の駐車場を出発。反時計回りに回る。

◎雲が70%、青空が30%、予報では午後から多少降水確率があるやもという天気だ。

◎ここは、大きな石がゴロゴロの山、それを思い出した。家一軒ぐらいの大きな岩がゴロゴロ。大きな岩に仏画が彫ってある、色がいれてある。そんな大きさの岩が、最後までいくつもあった。

◎修験者の山でもあるらしい。登ってすぐに立派な祠、その横に鎖場ならぬ、ロープ場。「オレもこれに挑戦」とよじ登った。石槌山の肝が凍る鎖場と違い、オレでも簡単にこなせる行場だった。

◎少し登ると、行者山というピーク、ここからはなだらかに、上へ上へ。まもなく5月という季節、落葉樹の枝々に若草色の小型の葉っぱが絵の具を散らしたように目にとびこんでくる。オレに言わせれば、レモンイエローの飛沫が散らばっている、という感じかな。

◎炭焼き窯の跡がある。日本の里山はどこにでも、「ああ　これは　炭焼き窯跡」というものをよく見る。半世紀以上前には、燃料は薪炭だった。オレも我が家にプロパンガスがやってくる中学生ぐらいまでは、そんな燃料で作ってもらった飯を食っていた。窯の横の看板に、「能勢の　三黒とは　炭・栗・牛」と書いてある。炭は茶道用の、「池田炭」といい、上等なものらしい。

◎フクロウの声が聞こえる。録音しようとセットする度に、鳴き声が終わる。「ホッ　ホッ」姿を見たことがない、野生のフクロウの姿を見てみたいものだ。今日の山行で、ハトぐらいの大きさの鳥が、横切るのを見たが、あやつは何者だろう、右から左へ二羽連れで横切った。

◎六体の石の地蔵が、赤い前垂れをかけてもらって並んでいる。休憩。持参のサンドイッチをほおばる。

◎頂上手前に、大きな伽藍の跡。月峯寺といったらしい。100人ぐらいの寺ヒトが居ても暮らしていけそうな大きな寺だ。昼も夜も人々がうごめき、読経、鉦、太鼓、風呂だ、飯だ、ざわめきが聞こえそう。

◎11時、783M、石ゴロゴロのてっぺんに到着。天気は青空が多くなってきた。風がきついのか大きな木はない。

◎昼飯は次の横尾山で喰おうと歩き出した。登りは南斜面だったが下りは北斜面、北斜面は紫色の山つつじがみんな蕾の状態、やはり北は冷たいようだ。雑木林の中、笹が膝ぐらいまで生えている。雑木林とはいえ、曲がりくねった松の木が多いかな。笹はひさしぶりに見た、よその山はシカが食い尽くしているのだが・・。

◎古びた石の標識、「摂津・丹波　國界　明治十年」となっている。この重いものを、よくも担いで登ったものだと感心する。歩荷のおっさんが一人でとは思われない、という大きさだ。

◎ここの山は、岩が多い、家ぐらいの大きさの岩、小さい岩、雨に丸く削られたのだろう。山全部が石でできているとは思われない、ゴロゴロしたやつが山の土の中にあり、少しずつ土が流れ、石が顔を出し、雨に削られ、なんて想像するが、「いやそれは違うぞ」と、どなたか教えてくれないかな。

◎高架鉄塔がある、電線が左右に流れている。地図を見ると線がはっきり書いてある。登るときにも見ていたが、注意散漫、見逃していた。ここは、鉄塔と電線があるのだ。山では迷った時など電線はいろいろと助けになる。

◎「もうすぐ麓に着くなあ」と思いながら、「なんだか曇ってきたねえ」昼飯を食ったころには、青空が広がっていたが、午後から青色が消え白色になってきた、涼しくなってきた、予報通りの天気模様だ。

◎駐車場に降りてきた。朝の到着時はがらんとしていたが、5台ほど止まっている、たったの5台だ、家の近隣の山、麓の駐車場はおそらくいっぱいの車だろう。このあたりは多少田舎なのか、登山の人も少ない。

◎コンロで湯を沸かし、コーヒーを淹れ、持参の菓子を喰った。軽く疲れた、されど面白い山でした。

◎またまた地道を少しぐるぐるおおまわり、5時前には、家にたどり着きました。